

	<p style="text-align: center;">エッセイ</p> <h2 style="text-align: center;">猫の利き腕</h2> <p style="text-align: right;">持田典秋</p>	<p style="text-align: center;">E-19</p> <p>発行日 2009/10/24</p>
---	---	--

我が家の猫は 9 才のヒマラヤン。7 年以上前にカザフスタンからの帰国子女である。名前は“ターニャ”。名付け親は彼女を知人から貰い受けた長男である。彼のロシア語の家庭教師の名前がタチアナ先生で、タチアナの愛称がターニャ。その縁で付けた名前のようなが、カザフスタンのれっきとした大学教授であるタチアナ先生にロシア語の文法でしぼられ、帰宅後“ターニャ！”と八つ当たりしていたらしい様子が目に浮かぶ。

長男が帰国した時我が家につれて帰り、一次預かりのつもりがそのまま居着いてしまった。それまでペットに興味を持っていなかった私は、付き合い方に戸惑ったが、いつの間にかターニャを完全な家族の一員として扱うようになっていた。

ターニャは、

- ① いくつかの人間の言葉を理解する。当然こちらもいくつかの猫の言葉を理解する。繰り返しているうちにターニャはいくつかの人間の言葉を話すようになる。低い声で“ゴハン、ゴハン”と鳴くときは鶏のさき身のゴハンが欲しいとき。流れている水道水が飲みたいときは、“オーイ、水”と階下から二階にいる私を呼びつける。
- ② 正確な体内時計を持っている。私が毎朝起きる時間を知っていて、その時刻になるとベッドのそばでないたり、爪を立てて椅子をガリガリ引っ掻いたりして“起きなさいよ。”という合図を送ってくる。それが毎朝正確に 10 分程度の誤差で。もちろん、食事、水などの催促のため。
- ③ 芸ができる。“ターニャ”という呼びかけや“バイバイ”に対して尻尾を振って応える。この尻尾というものがまたいろいろな表情をしている。大きく振ったり、わずか先だけをちょっと動かしたり、立てて歩いたり。
- ④ 待つことができる。私が夜遅く飲んで帰って来た時も、玄関のマットの上でじっと待っていて、三つ指立てて出迎えてくれる。もちろんターニャだけである。
- ⑤ 照れる。ターニャは散歩が大好き。家の中で飼っているため、外の空気を吸わせてあげようと抱いて散歩する。もちろん歩くのは私で、ターニャは抱かれて悠然とあたりを眺め回しているだけ。自分であるかなくても地理は理解している様子である。彼女は 20 分くらい平気でじっと抱かれている。体重 4kg といえども時間と共に重くなってくる。そのあたりが散歩の限界である。それで“散歩に行こうか”と声を掛けると喜んではいしゃぎ、捕まえようとするので逃げ回る。これはうれしくて照れているのである。ま

た、トイレから出てきたターニャと目が合うと、恥ずかしそうな顔をする。

そんな極めて人間的なターニャとの付き合いをしているうちに、ふとしたことから、「猫には利き腕（足）があるか。」という疑問を持ち始めた。どうもどちらかの腕(前足)が強いのではないかと。

猫はペンや箸を持つわけではなく、ボールを投げるわけでもない。野生時代に遡っても、道具を使って獲物を取っていたという話しは聞いたことがない。したがって、利き手・利き腕（正確には利き前足）を決める必要はない。猫にとっては、どうしても良いことかもしれない。

しかし、私にはなぜかそれがだんだん気になってきた。そのため、ターニャの利き腕があるのか試してみたい衝動に駆られ、ターニャをよく観察をし、またいくつかのことを試みた。

- ① 紐をたらし、それに飛びかかる様子を調べた。紐は猫が大好き、というよりも非常に反応が早い。それは、昔から蛇を獲物としていたからだといわれている。しかし、これには左右同じように反応し、右側に置くと右足で、左側に置くと左足で反応した。これは左右に差がない。
- ② ふざけて一緒に遊んでいると、猫パンチが飛んでくる。それも左フックが強烈である。
- ③ ゴルフボールを使ってサッカーの真似事をする。このときボールをコントロールするのは、左前足である。なかなか正確である。いふならば、猫界の中村俊輔？！
- ④ 近所の動物病院で月に 1 回程度爪切りをしてもらっているが、そのときの反応は、左前足の爪切りを異常に嫌がって怒り出す。それも毎度のこと。

さらに利き腕について確かめるため、診察に訪れたときに獣医に聞いてみた。しかし獣医は、利き腕に関してはそれほど興味を示さなかったが、爪を切っている時には先が折れて取れていることがあり、爪とぎをするときに、力が入るとそうなることがあると教えてくれた。ターニャにそれが多いいのは、左前足であることもわかった。

これで、ほぼターニャは左利きであることは間違いない。しかし、なぜ猫に利き腕のある必要性があるのか。

犬と違って猫は前足を武器として使う。犬はただほえて噛み付くだけ。芸として教えられていてお手とか言われて前足を上げているが、武器としては使わない。せいぜい、後ろ足で砂をかけるくらいである。

一方猫は、まず前足が出て、引っかき、パンチを出すと、前足が立派な武器である。もちろん、噛み付きもあるが、これは爪切りに行った直後、爪が武器とし

で物足りないときに使う補助手段である。この武器として使うかどうか利き腕のあるなしを決めるのではなかろうか。

インターネットで検索しても、猫に利き手・腕（足）が‘ある派’と‘ない派’が存在する。

しかし、見つかった事例の中で、英国の Deborah L. Wells と Sarah Millsopp によると、42 匹の家猫について、右利きか左利きかを調べるため、①ジャーからえさを取り出す、②頭上にかざしたおもちゃに手を出す、③床の上を動くおもちゃに手を出す、の 3 つの動作について調べたが、左右ほぼ同数で、また性別、年齢で特徴的な差はなかったと記述されている。

利き腕のある理由として、成長してゆく段階で、何らかの機会に右あるいは左が有利のことに遭遇し、そちらが強くなったのではないかというような説が多い。

その説に従うと、ターニャの場合は 2 才まで過ごしたカザフスタン時代に何かあったに違いない。小さいときに与えたおもちゃの影響か、住んでいた家の状況か、それとも何かほかにあったのか、原因は不明である。

猫ではないが、中華料理に使われる熊の掌は、左右で値段が格段に違い（一説には、右掌が 30 倍もするという）、そのわけは、右掌（みぎて）は筋肉が発達しているし、大好物の蜂蜜を取るために使う右掌に蜜の味が浸み込んでいて味が違うからだという。以前に採った蜂蜜がどうして掌についているのかと思ったが、掌を洗うような衛生的な熊はいないから、浸み込んでいるのかもしれない。この場合は、武器ではなく道具として前足が働いているケースである。しかし、中国の熊はすべて本当に右利きなのだろうか？馬鹿高くてまずい左利きの熊の右掌を食べさせられている人もいるのではないか。

人間で言えば、「右脳」は左半身と繋がり、直感的・空間的な情報の処理を得意とし、「左脳」は右半身と繋がり論理的・言語的な情報処理を得意としている。

これが猫にも通じるならば、左利きのターニャには右脳の活躍を期待し、算数のわかる猫ではなく、芸術を理解する猫になってもらうのが良さそうである。そういえば、時々私たちと一緒にソファに座り、音楽に聴き入っている風を装っている。

ターニャは、そんな議論にお構いなく、1 日 16 時間眠るといわれている猫の習性で、昼間は今日も私の愛用しているハーマンミラーのアーロンチェアを占領し、ぐっすりと眠りこけている。しかも時には大いびきをかきながら。一方、私は椅子を取られ、仕方無しに息子が小中学生の頃使っていた古ぼけた椅子でパソコンに向かっている。

こんな時は、チャーチルの言葉が頭をよぎる。

『犬は人を尊敬し、猫は人を見下すが、豚は人を友達だと思っている。だから豚が好きだ。』

(I like pigs. Dogs look up to us. Cats look down on us. Pigs treat us as equals.)

どうやら、ターニャは私を飼いならすことに成功したようだ。